

— あいちけん はたら がいこくじん
— 愛知県で働く外国人のみなさんへ —

あいちけん

愛知県で

あんしん・あんぜん せいかつ

安心・安全な生活を

たの

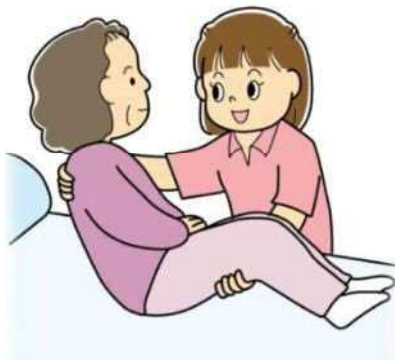
楽しむための

さぽーとが いどぶっく

サポートガイドブック

指導者マニュアル

First Step to
LIVE & WORK in AICHI



《 はじめに 》

愛知県で「技能実習」の在留資格で居住する外国人の数は、38,283人（2019年6月末現在）と日本で一番多く、新たな在留資格「特定技能」の創設に伴い、今後、より多くの外国人が新たに愛知県で就労することが予想されます。

これまで、多くの企業が、日々の試行錯誤の中で、受け入れた外国人とのコミュニケーションを図り、円滑な受入れのための努力をされてきた一方で、彼らに対し、どのように支援をしたらよいのか分からない、日本の文化や習慣は自分たちで勉強してもらえばよいのではないかと戸惑っている企業も多いのが現実です。

そこで、この指導者マニュアルは、外国人を受け入れる企業のみなさんが、新たに来日し、愛知県で就労する外国人に対して生活支援や就業支援を円滑に実施するためのサポートツールとして役立てていただくために作成しました。

円滑な受入れを進めるためには、彼らが日本の生活ルールやマナーをできるだけ早く学ぶことはもちろん、受入れ側も彼らの固有の文化や考え方に興味を持ち、双方が歩み寄ることが必要です。

カリキュラムを作るに当たりヒアリングをした企業のみなさんは、「受け入れる日本人従業員全員が、彼らのことを、外国から来た労働者として受け入れるのではなく、一緒に働き、同じ地域に暮らす仲間として受け入れるという姿勢を共有していることが、円滑な受入れの一番のポイントである。」と口を揃えて言われていました。そこで、このマニュアルの冒頭（第0章）では、研修を始める前に知っておいていただきたい「受入れ側の心構え」を紹介しています。担当者の方だけではなく、ぜひ従業員のみなさんで取り組んでみてください。このカリキュラムが、より調和のとれた職場環境を構築する助けになることを願っています。

《 目 次 》

はじめに	1
研修の進め方	3
第0章 受入れ側の心構え	4
第1章 働く／お金	6
第2章 働く／ルール	9
第3章 生活する／住居	14
第4章 生活する／交通	19
第5章 生活する／楽しむ	24
第6章 生活する／犯罪に遭わないために	28
第7章 生活する／病気・けが	31
資料： 諸外国事情	34
国籍別・在留資格別の外国人労働者数（愛知県）	35
ブラジル、カンボジア、中国、インドネシア、ミャンマー ネパール、ペルー、フィリピン、タイ、ベトナム	36
宗教上・習慣上の注意 《一覧表》	54
付録： 契約書（見本）、給与明細（見本）、社員紹介シート（フォーム）	55

※各章の最終ページに「ワークシート」があります。ご活用ください。

《 研修の進め方 》

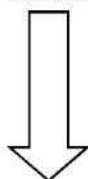
はじめに

- この研修カリキュラムは、1章あたり1時間で実施する想定で作られています。
- 1章ごとに完結する内容なので、必要なところから始めることができます。

研修の進め方

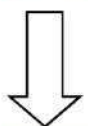
- 1時間で研修を実施する場合の、標準的な研修の進め方の例は以下のとおりです。

(復習/5分)



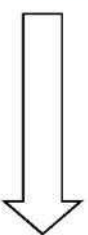
- 「ワークシート」を使い、前回の研修内容の復習をする。
- 何を学んだかを聞きとり、知識が定着しているか、確認する。
- 新たな疑問点がないか、確認する。

① 導入/5分



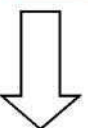
- 学習する章の到達目標を伝える。
- 事前学習で生じた疑問点を確認する。

② 座学(動画視聴含む)/40分



- 動画がある場合は動画を視聴し、ロールプレイやワークショップなど、章ごとの「おすすめワーク」を実施する。
※ 一方的に知識を伝えるのではなく、会話をしながら学習をすることが大切です！
(→「研修を効果的に実施するコツ」をチェック)
- 日本人社員にも参加してもらい、社内の人間関係構築に役立つ。

③ 振り返り・ワークシート記入/10分



- 各章の「ワークシート」に記入し、学んだことを定着させる。
- 到着目標を再度確認し、達成できたか振り返る。
- 「ワークシート」で不明点があれば、自分で復習するように意識づけをする。

研修を効果的に実施するコツ

- 一方的に知識を伝えるのではなく、「あなたの国ではどうですか？」などの質問をして対話をしながら研修を進めましょう。
- 座学だけでなく、実際に体験したり、実物に触れたりしながら学習しましょう。
(職場の安全衛生、ゴミの分別、アプリの活用など)
- 担当者以外の日本人従業員も一緒に参加するよう工夫しましょう。